

News Letter

2018. April
No.16

Japan Society of Stress Management

日本ストレスマネジメント学会 第17回学術大会・研修会 in 姫路 のご案内

永浦 拡 (神戸医療福祉大学 / 第17回大会事務局長)

はじめに

今年度の本学会学術大会・研修会は、**藤原忠雄先生** (兵庫教育大学・教授)のもと、兵庫県姫路市にて開催させていただくこととなりました。

昨年9月に施行された「公認心理師法」では、公認心理師に求められる技能のひとつとして「心の健康に関する知識の普及を図るための教育及び情報の提供」が掲げられています。また、学校現場では、小学校では今年度、中学校では来年度より「道徳の教科化」がスタートしますが、学習指導要領において、道徳的行為に関する体験的な学習等の充実が謳われていることは、既にご承知のことと存じます。

これらのことから、今後心理・教育の領域において、ストレスマネジメントのさらなる充実と発展が期待されることと思います。

メインテーマ

そこで今大会ではメインテーマを「**ストレスマネジメント教育を展望するー包括的ストレスマネジメント教育へのシフトー**」としました。これまで本学会で取り組んできた学校におけるストレスマネジメント教育を俯瞰するとともに、今後の発展について示唆を得られ、学びを深められる機会となればと考えております。

プログラムの紹介

まず、記念講演では、「学校教育におけるストレスマネジメント教育の展開」について、今大会の名誉大会長である**富永良喜先生** (兵庫県立大学・教授, 兵庫教育大学・名誉教授)よりご講演をいただきます。

次に、シンポジウムでは「**ストレスマネジメント教育の今後を展望するー包括的ストレスマネジメント教育へのシフトー**」と題し、**井澤信三先生** (兵庫教育大学・教授), **近藤卓先生** (日本ウェルネススポーツ大学・教授), **竹中晃二先生** (早稲田大学・教授)より、それぞれのお立場から話題提供をいただきます。

また、2日目には、心の教育、被災地支援、認知行動療法及びリラクゼーションと4つの研修を開催いたします。

その他例年通り、ポスターセッションも企画しておりますので、皆さまの研究・実践について、奮ってご発表ください。

日時:平成30年7月28日(土)・29日(日)

場所:イーグレひめじ・姫路市民会館

名誉大会長:富永良喜, 大会長:藤原忠雄,

事務局長:永浦 拡

重要なお知らせ

会場の「イーグレひめじ」ならびに「姫路市民会館」からは、世界遺産・姫路城が眼前です。学会はもちろんのこと、夏の播州・姫路をご満喫いただければと思います。

また、今大会は「公益社団法人・姫路観光コンベンションビューロー」より開催支援を受けていますので、ぜひとも姫路市内でのご宿泊にご協力いただきますようお願いいたします。

姫路市には例年、国内外を問わず多くの観光客が訪問いたします。特に学会開催期間は夏休みの時期ということもあり、ホテル等の予約は厳しい状況と予想されます。遠方よりお越しの先生方は、どうぞお早めにご宿泊先のご予約・確保をご検討ください。

お願い

最後になりますが、ニュースレターに、大会申込用の振込用紙（年会費の振込用紙とは異なりますのでご注意ください）のほか、チラシ、ポスターを同封させていただきました。ぜひ皆さまのご職場やお知り合いの先生方に、今大会のことをご紹介いただければ幸いです。

なお、今大会では、日本学校メンタルヘルス学会、日本学校教育相談学会の正会員の先生方には、本学会員と同様の参加費でご参加いただけます。2日目の研修会では臨床心理士・学校心理士の研修ポイントも申請予定でございます。ぜひとも多くの方にご参加いただき、皆さまの取り組みについて交流できる機会となればと願っております。

それでは、スタッフ一同、皆さまのご参加を、心よりお待ちしております。



世界遺産 姫路城 (写真提供：姫路市)



イーグレひめじ (写真提供：姫路市)

日本ストレスマネジメント学会第17回大会

開催：2018年7月28日（土）学術大会

29日（日）研修会

※ 詳細は、同封のチラシおよび大会ホームページ
(<http://stmane.web.fc2.com/index.html>) を
ご覧ください。

姫路市キャラクター しろまるひめ



リレーコラム

会員の皆さんにリレー形式で自由にコラムを書いて頂く企画です。特にテーマは決めず、担当者におまかせして取り上げてもらいます。第3回目は、オランダに在外研究中の清水先生に担当してもらいました。

現代の日本社会における蘭学事始



清水安夫（国際基督教大学）

2017年9月より、オランダのフローニンゲン大学（Rijksuniversiteit Groningen）にて、在外研究期間を過ごしております（Groningenのオランダ語での発音は、日本語での「不老人間」に近い発音となり、住んでいると長生きしそうです）。

ここGroningenは、オランダの北東の田舎街で、ドイツとの国境に近い北海沿岸の街です。首都のアムステルダムやハーグからは、約2時間半-3時間の距離にありますが、ドイツのオルデンブルグやブレーメンといった都会までは1時間半-2時間程度ですので、ドイツに行く方が近いという感じですが、ドイツ語の会話がよく耳に入ってきて来ます。近隣に大きな街がないので、北の外れの中核都市という感じでしょうか。街並みはオランダ特有のレンガ造りの建造物が並び、たくさんの教会の尖塔が空に向かって突き出しており、中世さながらの美しい光景が映し出されています。北海の天然ガス採掘の前線基地の街でもあるため、街には活気があり、とくに週に3回もあるマーケットの日には、多くの人が集まり、一日中賑わっています。

Groningenの街の特徴といえば、自転車の数（世界でNo. 1の個人の保有率だそうです）と自転車道が整備された街並みです（街の中心への自動車の乗り入れは厳しく規制されています）。環境整備

による行動変容は、行動科学でいうところのエコロジカル・モデルの実践のようで、この街の人々の肥満率の低さを見るにつけ、心理学実験の結果を見ている気になります。

そして、もう一つの特徴は、やはり大学にあります。オランダ国内では、ライデン大学（Universiteit Leiden）に続いて2番目古く（創立は1614年）であり、大学の規模はUniversiteit Utrecht, Universiteit van Amsterdamに次いで3番目に大きい大学（学生数は約2万人）であるため、街の平均人口が若いというのも街の活性化に寄与しています。



School of Behavioral and Social Science の中庭

ところで、日本人にとってオランダという国は、案外知られていない国というのが私の率直な感想です。現在、私が所属しているICUという大学は、学生も教員も世界中から来ているので、日本の大学の中では比較的国際色の豊かな方の大学だと思います。それでも、やはり教員も学生も留学先に選ぶのはアメリカかUKが圧倒的に多く、カナダやオーストラリアがそれに続くという感じですが。ドイツ、フランス、イタリア、スペインなどの歴史・文化・言語の専門家は、もちろん研究資源を求めてこれらの国々を目指しますが、日本の大学でオランダ研究の専門家（長崎大学にはオランダ研究

部門がありますが)が少ないこともあり、自ずと日本から来蘭する研究者数は少ないようです。とりわけ、行動科学や心理学の研究を目的にオランダの大学を選ばれる方は少ないので、私はかなり異質な存在に思われるかもしれません。実際に、私も18年前に、初めてオランダを訪れるまでは、ほとんど興味関心も基本的な知識すらなく、あまり気に留めるような国ではありませんでした。

ただ、他のヨーロッパ諸国よりも日本との関係が深いことは、中学や高校で習った歴史の教科書を紐解くことにより、記憶が蘇るかもしれません。

それでは、皆さんは、オランダと聞いて、具体的に何を思い描かれるでしょうか？田園地帯に立つ伝統的な風車の情景、お土産品の定番となっている木靴やデルフトの陶器、生花が好きな方はチューリップ、絵画が好きな方はレンブラントやフェルメールやゴッホを思い浮かべることでしょうか。また、アンネの日記や絵本で人気のミッフィー(オランダではニンチェ・プラウスって言います)などをあげる方もいらっしゃるかもしれません。私の場合は、ゴータやエダムなどのチーズに、ハイネケンを代表するたくさんのクラフトビールですが……。平均身長が世界でいちばん高い国(女性171cm, 男性184cm, 若い人の平均はもっと高いです)で、冬季オリンピックのスケート関係の種目がめっちゃめっちゃ強くて、サッカーのオランダ代表キャプテンのロッベン(Robben)のワールドカップでの活躍が印象に残っている方もいると思います(ロッベンはGroningenの出身です)。



凍った運河でスキーを楽しむ

また、日本史の授業でも学びましたように、日本とオランダとのご縁は、1600年にオランダ商船のリーフデ号が、豊後(臼杵)に漂着してから始まり(リーフデ号事件)、長崎の出島を經由し、蘭学として日本に西欧の知識や技術(特に医学や薬学)を伝え、江戸時代の日本の文化や社会の発展に大きく貢献したことは、ご存知の通りです。シーボルトの鳴滝塾(長崎)や緒方洪庵の適塾(大阪)などの蘭学塾は、高野長英や福沢諭吉などを輩出し、幕末から明治期にかけて活躍する日本の若き研究者や知識人にとって憧れの学び屋であり、最先端の医学や科学を伝授してくれる学校でした。私たちは、杉田玄白や前野良沢がオランダ語の解剖学書を苦心して翻訳し、「解体新書」を著述したことなどは歴史の授業で学びましたが、明治政府が国費留学生として、榎本武揚(国際法・海洋法の専門家、明治期の外務大臣)や西周(哲学者、philosophyを“哲学”、mental philosophyを“心理学”と日本語訳名をつけた学者)をオランダのライデン大学に派遣していたことなどは、意外と知られていないことです。日本への帰国後に、彼らが日本の社会にもたらした数多くの功績を考えると、学問を通じての日蘭関係の縁の深さを象徴しているように思われます。

残念ながら、このような日蘭の江戸時代を通しての強い結びつきは、明治期以降は薄れてしまい、日本人の学びにとって、オランダの存在は小さいものとなってしまったように感じます。ただ、かつての世界の貿易大国は、第二次大戦後には影を潜めましたが、現代においても、ヨーロッパの小国として別の意味での異彩を放っているように思います。

例えば、今や日本でも知らない人はいなくなりましたが、なかなか日本の社会制度には導入できない「ワークシェアリング」は、オランダが1980年代に労働制度として導入することに最初に成功した国です。その関係か、産業組織心理学(Occupational & Organizational Psychology)の分野での研究論文は、オランダから発信されているものを多く見かけます。現在、アメリカや日本の社会では、貧富の差の二極化が進んでいるのに

対して、「ワークシェアリング」の社会制度化の成功のお蔭で、オランダの労働者の雇用は安定し、高い社会保障制度の維持が可能となっています。

中世からの市民階級の台頭により繁栄した商人気質の社会づくりの考え方や感覚が根底にあるため、功利主義的な発想がオランダ人には深く根付いており、とにかくドラスティックな改革を進めるのが上手いのがオランダ社会です。経済の安定した状況や功利主義的な様子は、例えば、スーパーや市場での買い物の際に、二捨三入や七捨八入などの制度がまかり通っているところからも分かります。その他、労働環境の改善により、過労死や自殺などの労働災害が減少し、富の偏在が小さくなったために、社会環境が安定して犯罪率や子どもの非行問題などが低下するなど、各種の恩恵がもたらされています。

このような社会制度改革による安定した雇用の創出は、単に労働条件や労働者の職場環境を良くしただけでなく、親が子どもと家庭で過ごす時間の確保にもつながっています。親子団欒の時間の増加により、必然的に親子間のコミュニケーションの機会も増え、家庭内の人間関係も良くなったと言います。

昨今、日本では親子間の断絶問題や兄弟間の確執問題などが家族心理学での研究テーマともなっておりますが、一方、オランダでは、子どもと親との関係が大変良好な国民性が日本でも話題になったことがあります。親子間の良好な関係性は、毎年、国連児童基金（UNICEF）が国別に比較している「世界の子どもの幸福度」にも表れており、ここ数年連続して「オランダの子どもが世界一しあわせ」と評価されています。

日本では、急速に少子化が進んでいますが、オランダでは反対に子どもの出生率が増加しています。ウィークデーの昼下がりに街を歩いていると、オランダ特有の自転車に子どもを2-3人乗せたお父さん、公園で子どもたちと和やかに遊ぶお父さんの姿を良く見かけます。日本だと、「あのお父さん失業しちゃったのかな？」とか、「まさか誘拐犯じゃないよね？」なんて疑いの目を向けられそう

ですが、父親の育児休業期間の保証はもちろん、子育て期の父親は、ちゃんと労使交渉をする権利を持ち、後のキャリアに響くことはないのだそうです。自分のキャリアを捨てることなく、安心して育児のための長期休職を取得し、就業日数や就業時間の短縮化が図れるので、子どもとじっくり向き合って過ごす時間として使えるようになっていそうです。少なくともグレル子どもや親子関係の確執問題が減るといような事例から、私たちは何かオランダから学べそうな気がします。

オランダの国土の面積と人口は、ほぼ九州の面積と人口と同じくらいです。地理的にはドイツやフランスという大国に挟まれた小国のせいか、それだけに国家として存続していることには、何らかの意味や秘策などがありそうです。イギリスのEU離脱が決まり、ロンドンにヘッドクォーターを置いていた世界中の企業は、オランダのアムステルダムやロッテルダム、ドイツのデュッセルドルフかハンブルクへと次々と移設が始まっています。近い将来、多くの日本人が、オランダで仕事をすることが予測されます。

400年の国家間交流を持つ日本とオランダとの関係は、将来的に緊密な関係を復活させそうな気配を感じています。ここでは、オランダにおける行動科学や心理学の研究についての具体的なお話はいたしませんでしたので、また、学会でお目にかかりました折にでもお話させていただければと思います。是非、気軽にお声をかけてください。

オランダの社会環境や社会制度、功利主義的な文化背景から生まれる思考性などは、この国ならではの心理学関連の研究の特性につながっていることを実感しています。ちなみに、オランダの伝統的な大学では、すべての心理学に関する専門教育や研究者の所属は、“School of Behavioral & Social Sciences”にて行われています。このことから、学問の捉え方に特徴が示されており、オランダでの研究をモデルとした知識を取り入れられる可能性がたくさんありそうです。

2018年1月16日 Groningenにて。

各委員会からの連絡

〈研修委員会報告&ご案内〉

2017年度の研修会を2018年2-3月に予定してましたが、諸般の事情により中止することとなりました。

2018年度には開催する予定ですので、会員の皆様には、開催のご希望（場所・時期・内容）などを学会理事を通してご提案いただけましたら幸いです。また、直接、研修委員会（担当：清水安夫：syasuo@icu.ac.jp）まで、ご連絡をいただいても結構です。

皆様からのご希望をお待ちしております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

〈広報委員会からのお知らせ〉

学会ホームページを刷新しております、是非ご覧ください。

ニュースレターで取り上げてほしい、ストレスマネジメントに関する特集などありましたら、姫路大会で是非声をかけてください。

〈編集委員会からのお知らせ〉

迅速かつ教育的な審査を目指しております。会員の先生方からのご投稿を心よりお待ちしております。詳細は、学会のホームページをご覧ください。

ショートコラム：新しい国家資格、公認心理師について vol.1

公認心理師法が成立して、心理学におけるはじめての国家資格が誕生しました。このコラムでは、公認心理師に関するあれこれを紹介したいと思います。今回はカリキュラムについて簡単に紹介します。

平成30年4月入学生から、公認心理師養成カリキュラム（いわゆる1号ルート）がスタートします。学部では、25科目取得する必要があります。心理学基礎科目：公認心理師の職責など計6科目、心理学発展科目：（基礎心理学）；心理学的支援法など9科目、（実践心理学）；健康・医療心理学など5科目、心理学関連科目：精神疾患とその治療など3科目、実習演習科目：心理演習と心理実習の2科目。大学院では、心の健康教育に関する理論と実践など講義9科目と心理実践実習の実習1科目です。

学部・大学院ともに実習が必修化され、時間数も学部80時間以上、大学院450時間以上（そのうち担当ケース270時間以上）と最低時間数が決まっています。また当分の間の措置として、学部・大学院ともに病院等の保健医療分野への実習が必須で、福祉分野、教育分野、司法・犯罪分野及び産業・労働分野に大学院は2分野以上、学部は便宜行うこととなっています。早ければ、本年度から大学院の実習が始まりますので、現場の先生方と大学教員との連携と協働がこれまで以上に求められます。会員の先生方でストレスマネジメントの視点を持った素敵な後輩を育てる良い機会になればと願っています。



編集後記

本号は、大会の案内をメインにしたニュースレターです。

7月30日に姫路で先生方にお目にかかるのを楽しみにしております。そして、在外研究中の清水先生からのオランダ事情の紹介でした。今後、公認心理師についても少し触れてみます、読み応え十分です！（JY）